

〈考古学部会〉

ロシア極東における新石器時代の  
石器使用痕研究の実践と課題

東北大学大学院文学研究科 鹿又 喜隆

ロシアでは、新石器時代が早期（一・三～一万年前）、前期（一万～八千年前）、中期（八～五千年前）、後期（五～三・五千年前）の区分で変遷することが示されている。しかしながら、その広大な面積の割に発掘された遺跡数は少なく、文化内容の詳細な変遷が明確になった訳ではない。本論の対象となる極東地域では、早期の遺跡の発掘事例がないのに対して、完新世の最温暖期頃には複数の文化が並存することが特徴とされる。そして、その位置的環境から、中国北部や韓半島との関係が深く、比較文化的研究をおこなわずに、その文化形成過程を追及することは困難である。例えば、新石器後期のザイサノフカ文化では、中国と北朝鮮の国境に位置する白頭山の黒曜石が石器素材として利用されており、その生業基盤であるアワ・キビ農耕と共にもたらされたと考えられている。また、温暖期である中期のベトゥカ文化では、北海道で石刃鏃と呼ばれる特徴的な狩猟具が製作され、漁撈具や石斧も多いことから、狩猟・採集・漁撈が生業の基盤であったと推定される。本論では、ザイサノフカ文化とベトゥカ文化に属する二つの遺跡を対象に、石器使用痕分析を実施し、推定される生業活動と関係するような使用痕が得られるかを確認したい。また、分析の実践を経てみえた課題について言及したい。

本発表は科研費（16KK0020）の成果の一部である。